

『ものを言う建専連』になれ

京都大学大学院工学研究科建築学専攻
古阪秀三

日本の建設生産システムは古来「もの言わぬシステム」であった。「もの言わぬ」というと語弊があるかもしれないが、発注者はいちいち細かいことを設計者に言ったわけではないし、設計者もいちいち細かいことを施工者に言ったわけではない。生産システムの川上側の者は、川下側の者に向かって、常に「よきにはからえ」であった。川下側からの細かい説明も必要なかった。それでもまともな建物が作られてきた。これらは、日本のシステムの特長としてよく言われる長期取引関係、相互依存関係の成果である。つまり、厚き信頼関係の下では、相互に相手側が喜ぶであろう姿を頭に思い描いて、誠心誠意仕事に打ち込み、実際に喜ばれる顔を見て、自らの喜びともなしたのである。ここで忘れてならないことがひとつある。それは相手側がやってくれる仕事の中身・出来栄のほどが自分にもある程度わかっていたということである。このようにしてお互いがもの言わずとも、了解事項としてすませることができたのである。

ところが、建設活動の国際化、日本の建設工事費の高止まり現象、発注者のプロジェクト関与の強化、ゼネコンスキャンダルの頻発など、そしてそれと前後して起こったバブル経済の崩壊によって、「よきにはからえ」はなくなった。発注者からはさまざまな要求が出るようになった。建設産業を取り巻く周囲の目も厳しくなった。これでもか、これでもかと建設産業へのプレッシャーは強くなるばかりである。そして、建設工事費の縮減要求はもはや限度をはるかに超えてしまっている。それでも、仕事ほしさにダンピング競争が設計においても、ゼネコンにおいても、専門工事業者においても激化している。「ご無理ごもつとも」「おっしゃるとおり」と言わんばかりに、卑屈に川上側の要求に迎合しているのである。そのつけは職人賃金のさらなる低下につながり、年収300万円に満たない職人が急増している。それでも「ご無理ごもつとも」なのである。

そんななかで、「おことばですが」と言うプロジェクト関係者が現れた。「この予算でこの設計内容の実現は無理ではないか」「この構造設計は過剰設計ではないか」「このおさまりに工夫の余地はあるのではないか」。言い方や対象は様々であるが、発注者に向かって、設計者に向かって、施工者に向かって、良かれと思うことを素直に表明する。この関係者はもちろん、お察しのとおり、コンストラクション・マネジャー（CMr）である。あまりにも良く書き過ぎているかもしれないが、少なくとも彼らの存在理由は様々な「おことばですが」を言うところにある。そんなことをいったら、この業界から退場しなければならなくなるのではないか。そうなのである。多くの人達、グループが現れては消え、消えては現れている。しかし、「おことばですが」が受け入れられて初めて彼らは仕事を受注することができ、その繰り返しを日夜やっているのである。「おことばですが」が言えない限り、仕事に近づくことはできないし、近づいたとしても発注者を説得できなければ受注には至らないのである。対極に疲弊しつつはあっても、伝統的なご無理ごもつともシステムがあるわけだから。

さて、専門工事業者はどうか。うわさでは、専門工事業者で倒産が相次ぎ、職人の賃金もさらに低下していると聞く。しかし、その悲鳴はなかなか聞こえてこない。「我々はそんなに困っていないよ」「じっと我慢しているんだ」「きびしいよ」「もうもたないよ」「どんな職人かわからないが、外注で何とかしているよ」どれなんだろうか。はたまた、誰かに遠慮があってもものが言えないのか。もし、多くの難問を抱えているのだとすれば、もっと多くのことを語って欲しい。そして、極力情報を公開して欲しい。実態をふまえてものを言い、役を演ずることができるのは当事者であり、筆者ら外部者はあくまでも応援団に過ぎない。役者が役を演じない限り、応援団の活動に迫力はない。勇気をもって『ものを言う専門工事業者』、『ものを言う建専連』になって欲しい。